# ビーレフェルトでの研究と生活

Bethel Epilepsy Center
荒井　勇人
鳥取大学医学部附属病院脳神経小児科

私は2025年8月から、ビーレフェルト大学附属ベーテルてんかんセンター、Paediatric & Adolescent EpileptologyのPolster先生のもとで研究をする機会をいただきました。

このてんかんセンターはヨーロッパ最大級の施設であり、世界で最も歴史のある包括的なてんかんケア施設の一つとして150年以上の歴史を誇ります。障がいのある人々への手厚い支援で世界的に有名で、日本の皇后も訪問したことがあり、その記念として日本庭園が敷地内に造設されています。

私は、この施設でPolster先生と、本センターの研究支援部門で統計学に詳しいHagemann先生のバックアップのもと、小児てんかん患者とその家族への家族ケアに関する研究を行っています。私の研究では、研究同意書を家族から取得する必要があり、ドイツでは基本的に会話がドイツ語で行われることから、高いドイツ語能力が求められます。そのため、私は民間の語学学校だけでなく、大学主催のドイツ語教室にも通い、半年でなんとかB1レベル（英検準2級相当）までドイツ語能力を高めました。



←ベーテルの敷地内にある日本庭園

この過程で、さまざまな国の人々と交流することができました。特にウクライナなどの東欧諸国の方が多く、その他にも中東（特にパキスタンとイラン）、南米、アジア（特にベトナムとインド）、アフリカから来た方々も多くいました。一方で、日本人とは数人程度しか知り合うことができませんでしたが（ビーレフェルトには日本人は最大で20人程度しかいないそうです）、自分がマイノリティになることは日本では経験できないため、とても貴重な経験でした。

一方で、孤独感を感じることもあります。言語の壁のため、自分の思いや考えを十分に伝えられないことは大きなストレスでした。日本であれば10分で済む研究に関する些細なディスカッションも、こちらでは倍以上の時間を要しました。相手が困った顔をしたり、時には少し怒った顔になることに耐える必要があり、精神的に辛くなることがありました。

このようなときに支えになったのは、やはり家族でした。妻はドイツ語が全くできない状態から大学の語学教室に通い、毎日の買い物で一つ一つドイツ語のフレーズを習得していく努力をしていました。子どもたちは公立の幼稚園に通いました。初めは行き渋ることもありましたが、徐々に友達を増やし、今では楽しんで幼稚園に通うようになりました。妻と子どものこのような姿に私は励まされ、これらが日々努力を続ける原動力になっています。家族とともにドイツで成長し、いずれその経験を日本の発展に繋げていきたいと考えています。

最後になりますが、このような貴重な経験を可能にしてくださった上原記念生命科学財団に心より感謝申し上げます。